商・奥瀬ゼミ　国コミュ・岡村ゼミ

北海道でアップサイクル商品提案

北海道で企業や研究機関の担当者を前に新商品をプレゼン

商学部・奥瀬喜之ゼミと国際コミュニケーション学部・岡村りらゼミは2023年度後期、北海道のリサイクル企業などと協力し、アップサイクル商品の企画提案グループワークを行った。商品企画やマーケティングを学ぶ奥瀬ゼミと、世界の環境政策比較をテーマにしている岡村ゼミ、それぞれの視点で新商品を提案した。

アップサイクルとは、本来は捨てられるはずの商品に新たな価値を与えて再生し、元の商品よりも価値の高いものに生まれ変わらせる新しいリサイクルの形のこと。今回は地方独立行政法人北海道立総合研究機構（札幌市）と、総合リサイクル業を営む株式会社マテック（帯広市）と協働し、自動車の廃材を用いたアップサイクル商品を提案した。

奥瀬ゼミの2チーム8人は、車の座面に使われていた皮革素材を利用し、愛車のナンバーなどを刻印したキーホルダー、シートベルトを再利用したキャリーケース用のベルトなどを提案した。メンバーの小松明日香さん（商3）と山川真奈さん（商3）は「素材の良さを生かしたリサイクルやアップサイクルについて深く考えることができた。SDGsの観点からも、今あるものを生かした新しい製品の提案というのは大事だと思うので、今後の商品企画でも取り入れていきたい」と話す。

岡村ゼミは8人が参加。全員が約半年間の留学を経験しており、それぞれの留学先の知見を持ち寄って議論した。「アップサイクルするのなら実際に使われるものでないと意味がない」と考え、防災、観光などに着目。防災コートやエコバッグなどを提案した。平岡杏菜さん（国コミュ4）と鈴木優希さん（国コミュ4）は「海外での事例を取り入れながら提案することで、日本のいいところや課題を改めて知ることができた」と振り返る。

両ゼミ生は3月8日に札幌市で最終発表会を行い、石狩市にあるマテックのリサイクル施設を見学した。

同一テーマに2学部で取り組んだことについてそれぞれのゼミ生は「着眼点や考え方が異なり、勉強になった」と刺激を受けた様子。グループワークは本年度も継続の予定で、商品化を目指していく。

図書館春の企画展

江戸の妖怪展

図書館春の企画展「春にやってきた江戸の妖怪大集合2024――向井信夫文庫を中心に――」が生田、神田両キャンパスで開催された。

本学が所蔵する「向井信夫文庫」は、江戸期和本の収集家として知られる故向井信夫氏が長年かけて集めた国内有数の戯作コレクション。滑稽本、人情本など江戸期和本4090作1万346冊が中心で、2018年には新たに浮世絵1481点が加わった。

個性的な絵や和本の数々が展示された

企画展は、向井信夫文庫の収蔵作品を中心に構成。4月15日から5月15日まで開催された生田キャンパス図書館本館研修室の展示は、2016年の展示のリバイバルであり、また新たに浮世絵も加え、さらに充実した展示となった。

「妖怪図鑑」「怪談」「愛された妖術使い」など六つの章に分けて、異界のものたちを題材とした貴重書を紹介。江戸時代の妖怪画の先駆けともされる『画図百鬼夜行』から、江戸末期に流行した妖術使いが活躍する合巻（草双紙）まで、江戸時代の妖怪、あやかしがずらりと並ぶ。また、新コレクションから妖怪や怪談を題材にした浮世絵を初公開した。

『近世怪談霜夜星』より

ユーモラスな仕草の妖怪、おどろおどろしい幽霊など、江戸の庶民に愛された個性的な絵や和本の数々を、訪れた学生が興味深そうに見入っていた。

「貴重書は普段は目に触れる機会が少ないため、企画展を通して向井信夫文庫を広く知ってもらいたい」と図書館担当者は話す。

2025入学ガイド

専修大学のすべてが分かる「2025入学ガイド」を5月下旬から配布します。本学ホームページから、デジタルパンフレットの閲覧、資料請求ができます。

◆入学センターインフォメーション
【神田キャンパス】TEL 03・3265・6677
【生田キャンパス】TEL 044・911・0794
【資料請求】

ゲストと意見を交わす佐藤教授（右）

社会科学研究所 災害研究会

災害対応テーマに公開研究会

専修大学社会科学研究所災害研究会（佐藤グループ）が4月8日、『災害対応と近現代史の交錯』（共立出版）の刊行に合わせた公開研究会を神田キャンパスで開いた。佐藤慶一ネットワーク情報学部教授らが報告を行い、国内外の研究者約30人と意見を交わした。

佐藤教授は、デジタルアーカイブと質的データ分析を活用して災害の社会的意味などを探った自著について、「災害と歴史や社会の関係性の大枠をつかむことに主眼を置いた」と解説。「災害の被害は直前の社会的状況・構造と密接に関係している。災害や危機に懸命に対応する中から、新たな社会につながる理解や認識を見いだすことができる」と語った。

また、巨大災害が多発している現状を踏まえ、「日本における災害対応や防災への取り組みには長い歴史があり、それらを学ぶことは普段の備えにもつながる」と災害研究の意義を説いた。

ゲストとして参加したアンドルー・ゴードン氏（ハーバード大学歴史学部教授）、柴山明寛氏（東北大学災害科学国際研究所准教授）、北原糸子氏（歴史地震研究会元会長）による研究報告もあった。

ゴードン氏は、ハーバード大が中心に進める「日本災害デジタルアーカイブ」プロジェクトについて、「連携」「参加」をキーワードに説明。柴山氏はデジタルアーカイブが抱える課題と解決のための処方箋を示し、北原氏は前近代から近代にかけて発行された災害ビラ・ポスターに焦点を当て歴史学の手法で考察した。

会場を交えた意見交換で、災害の記録を残す・伝えることの意義や、それらを集めて分析できる仕組みを整備することの重要性などを確認した。

訃報

毛利健三氏（もうり・けんぞう）元経済学部教授
1月31日、89歳で死去。1995年から2005年まで在職。専門はイギリス経済。

今井雅和氏（いまい・まさかず）経営学部教授
5月8日、63歳で死去。2011年入職。主な担当は、経営学。

専修人の新しい本

金融政策の大転換
―中央銀行の模索と課題

田中隆之 著

去る3月、日銀が17年ぶりに利上げを行い、長短金利操作と呼ばれる緩和政策も解除した。一方、米欧の中央銀行は、40年ぶりと言われるインフレを抑えるための急激な金融引き締めを終え、利下げに転じようという局面にある。

本書は、こうした目先の展開を理解するためにも、まずはここ30～40年の金融政策の枠組みの転換に注目し、その整理、分析を提示している。特に、いわゆる非伝統的金融政策を分類してそのメカニズムを明らかにし、日銀だけでなく、2008年の世界金融危機後にこれを実施したFRB（米国）、BOE（英国）、ECB（ユーロ圏）の政策をも幅広く分析した。

さらに、現代の中央銀行が抱える課題として、低金利下での物価コントロールや資産価格バブルの問題、財政ファイナンスの問題にも斬り込んでいる。（慶應義塾大学出版会・税込み5940円）

著者（たなか・たかゆき）経済学部教授。金融政策、日本経済論。

災害対応と近現代史の交錯
―デジタルアーカイブと質的データ分析の活用―

佐藤慶一 著

本書は、著者がハーバード大学ライシャワー日本研究所で在外研究した成果をまとめたものである。第Ⅰ部「災害対応を通じて社会状況・構造をながめる」では、中世ペスト、ロンドン大火、リスボン地震、関東大震災、太平洋戦争、東日本大震災・福島原発事故といった巨大災害を扱い、前後の社会状況・構造との関係性を探索した。第Ⅱ部「質的データ分析による探索」では、ネット検索、日米の新聞記事、専門家へのインタビュー、思想や映画との関連から、東日本大震災の社会的影響や災害の社会的意味づけについて考察を重ねた。

多くの学生や社会人の方々に手にとっていただき、災害や危機を通じた人間や社会の変化・移行について考えるきっかけとなることを願っている。（共立出版・税込み3960円）

著者（さとう・けいいち）ネットワーク情報学部教授。情報学。